

## 第11話 平氏の暴虐

賢人重盛が薨じた後は、清盛の悪行がますます甚だしくなる。

ついに兵を率いて都に上り、関白以下の官職をほしいままに動かしたり、  
法皇を押し込め奉ったりする。高倉天皇のお歎き。御讓位。

さて清盛の威勢は、その後もますます盛んになるばかりでしたが、鹿ヶ谷の事件の起こった翌年の11月、先に皇后にお立て申した娘の徳子の腹に皇子がお生まれになり、その翌月、皇太子にお立ちになってからは、そのわが俣はいよいよ増長した。

### 重盛の薨去

重盛は見るに見かねて、いろいろと諫めてみたが、その時々こそ思い止まっても、心の底から改めるといふ様子がなかった。重盛はこれを始終気に病んでいたが、その心配が次第に嵩じて、重い病気となり、その翌年の7月、ついに薨じた。時に年は42才でした。

この重盛の死に就いてはいろいろの言い伝えがあります。ある書物には、重盛が父の無道を苦に病んで、熊野の社に参詣して死を祈ったと書いてある。それに依ると、その年の5月の頃に、熊野権現に参詣して、帰って幾日も経たないうちに病みついたが、重盛は療治をしようとしなかった。その頃、たまたま中国から名医が来て滞在していたので、清盛は福原からわざわざ使いをよこして、その医者に診せるようにと勧めて来たが、重盛はそれをも固く断って診させなかった。

彼はただ仏を念じて死ぬのを待っていたというのです。果たしてそういう事があったかどうかは分からないが、父の無道が彼の死を早めたという事だけは事実であったようです。

しかし、それはともかく、重盛がここで死んだ事は、平家にとつての大きな不孝でした。さすがの清盛も、この時ばかりはしみじみと心細く感じた事でしょうが、それと共に、その後は諫める者の全くいなくなったのを幸いにして、誰に憚るところもなく、いよいよ横暴を極めるようにもなった。

### 清盛の横暴ますます募る

その年の11月14日の事です。福原にいた清盛は遽かに数千の兵を率いて都に上って来た。朝廷を怨み奉る仔細があつての事だという噂が立った、その時の関白の藤原基房も、何か内々に告げ知らされた事があつたと見えて、急いで院の御所に参つて、「今度、太政入道が都に参るのは、この基房を島流しにするためだと申すことでございます。どこへやられますことやら分かりませんが、御前に参る事も、これが最後になりそうかと存じます」と言つて、はらはらと涙を落とした。

法皇には、「一体何の罪があつて、さような事を致すのであろう？ それだと、我とても安穩ではないかもしれない」と仰せられて、法皇もまた涙を落とされた。実際、お政治は今、法皇と関白との取り計らいであるべき筈であるのに、福原に隠居している入道の身で、これはまたどうした事なのでしょう？

## 清盛の言い分

しかし、これにも清盛にも一応の理屈がないわけではなかった。というのは、重盛が死ぬと間もなく、法皇は関白の基房らとご相談の上、重盛の領国であった越前国—これは元来、功田として賜ったものであるから既に嫡子の維盛が相続していた—のを、まだ公に申し出ていないというだけの理由でお取り上げになり、院のご領にお加えられた。もう一つは、そのころ、中納言の役が一つ開いていたので、先の関白基実の子で清盛の婿に当る基通を、それに任じて下さるようお願いしておいたのに、法皇はこれをお許しにならずに、関白基房の子の師家という僅かに8才になる子をそれに任じた。そういった不平が外にもまだいろいろあったのです。

重盛を亡くしてから、悲しみと憤りでむしゃくしゃしながら福原に引き籠っていた清盛がどうしてこれらの不平をいつまでも黙っておきましょう。例の傲慢な、わが儘な心がむくむくと膨れて来ると、「この入道は何とおもっているのだ！一言の相談もなくして、勝手な取り計らいをするという法があるか？よし、それならばこちらにも考えがある、どうするか見ておれ」というので、さてこそこの俄の上京となったのです。

## 清盛の威嚇

清盛は都に着くと、子の重衡を内裏にやって、「このごろのお政治の有様では、いつ朝敵の罪を受けるか分かりません。一旦そうなるからでは悔いても無益ですから、今のうちに身の暇を賜って九州に引っ込もうと思います。ついては皇后と皇太子を奉じて参りたいと思います」と奏上させた。これは明らかに嚇かし奉ったのですが、朝廷では非常に驚かれて、勅使を清盛の邸にお遣わしになり、その怒りをお宥めになるために、清盛が好いと思うように改革することをお許しになった。

すると、清盛は基房の関白をやめて太宰権師に貶し、自分の婿の基通を内大臣関白とし、太政大臣藤原師長以下、法皇に近づいていた39人の人々の官職を奪って、そのうちの幾人かは遠国に流すこととした。いや、そればかりではなかった。

## 法皇を押し込め奉る

その二十日には法皇の御所である法住寺を俄かに雲霞のごとき軍兵が取り囲んだ。2 - 30,000騎もあるように見えた。御所にいた公卿、殿上人、御所を護る北面の武士、女の人達までが、これはどうした事かとただ呆れていると、平治の乱に、右衛門督信頼がしたように、御所に火をかけて人をも皆焼き殺すのだと言い出した者がいた。忽ち部屋々々の女達から召使の者共まで喚び叫んで、跣足で逃げ出して鉢合わせをしたり、物に躓いて倒れたり、御所の内は全く上を下へと転倒して大騒ぎとなった。

法皇は、この間から世の有様を、腑に落ちない事ばかりだとおぼしめされていたけれども、こう早く、かような事までするとはお思いになっていなかったのも、今、まのあたりにこの騒ぎをご覧になると、只呆れておいでになった。

その時、御車寄には、前右大将平宗盛が参ったので、法皇は、「これは何うしたというのだ？遠

い国、遥かな島へでも遷されるのではないかと仰せられると、宗盛は、「そんな事がどうしてございましょう。世間が鎮まるまで、しばらく鳥羽殿にお遷りを願ひ奉れと、父の入道が申すのでございませ」と申し上げた。「ではお前が送ってくれ」と仰せられたが、宗盛は父の入道が後で何というかもと、それが恐ろしくて、お供に立たなかった。

法皇には、これにつけても思い出されるのは重盛だ。あの兄に比べて何という劣った宗盛の心であろう。先年も、すでにこういう目に遭う筈であったのだが、重盛が身に代えて諫め止めたからこそ、今日まで無事に来た。今は諫める者がいないので、こういう事をもするのであろう。これから先が思いやられると、お涙を流しながら御車にお乗りになった。

その御車にはただお経の箱ばかりが入られた、公卿、殿上人は一人もお供に立たず、北面の武士が2,3人お供につただけで、御車の前後左右には、警護の武士が数もしれないほどに打囲み取囲んで、七条を西に朱雀の大通りを南に下って行った。その道々、上下貴賤の男女までも、法皇がお流されるになると口々に騒ぎ立てて見送り奉ったので、お供の兵までも涙を流した。

### とぼどの鳥羽殿の法皇

法皇を鳥羽の北殿にお入れ申すと、平家の武士の肥前守泰綱という者が、清盛の命を受けてお守り申し上げたが、この御所には高い官職の者は一人も居らず、ただ尼さんが一人御用を足しているばかりであったから、その淋しさは無上でした。御門の内や外には武士が一ぱい充ち満ちて、はるかにそのわめき騒ぐ声は聞こえたけれども、御座所の近くはしいんとして誰もいないのです。法皇にはただ夢の心地でおわして、お食事を差し上げても、ご覧にならずに、ただ涙をのみ流しておられた。

やがて兵衛尉の業忠という、今年16才になるのが一人いたのを御前に召して、「我は今夜のうちに命を取られるような気がするから、最後の支度に湯を浴びたいと思うが出来まいか？水では冷たい気がするが」と仰せられた。業忠は今朝からの余りの事に肝魂も身に添わずにいたのですが、この仰せを承ると、一層悲しくなってお返事さえも出来なかった。それでもやと涙を抑えて立つと、狩衣の袖をたくし上げて、釜に水を汲み込んだが、薪がない。小柴垣をこわしたり、縁の下の束柱を取って割ったりして、それを焚いてお湯を沸かして差し上げた。

法皇は、お湯を召されて後は夜通し法華経をお詠みになっていた。これが最後のお勤めとお思いになられたからでもあったろうか、いつもよりも殊に物悲しくて、鈴の響きも耳に透り、読経の御声も肝に銘じた。しかし、その夜は何事もなくて、明けて翌日となった。

その頃、法皇のおそばにお仕え申していた静憲法印というのは、平治の乱で、信頼に殺された少納言入道信西の子で、父に似て才学にすぐれていたが、この日、法皇のおそばに人一人もいないと聞くと、清盛の西八条の邸に行き、特にその許しを受けて、急いで鳥羽殿に参った。法皇はその時も御声高くお経をお読みにになっていたが、法印の姿をご覧になると、「おお来たか！」とお嬉しげに仰せられると共に、お経の上にはらはらとお涙をこぼされた。静憲法印もそのお有様をお見上げして、お心の中をお察し

## 第11話 平氏の暴虐

すると、法衣の袖を顔に当てて暫くは物も言うことができずに泣いていた。

ただ一人おつき申していた尼さんも、歎きに沈んでいたが、静憲が来たのに力がついて、起き上がって泣く泣く言った。「昨日の朝、法住寺殿でお食事を召し上がった外は、昨夜も、今朝も、御膳はご覧にさえもなりません。夜通しお寝みにもならず、お歎きになっていられたことですから、お命のほどまいかがかと案じられます」とて、又さめざめと泣いた。

静憲法印は涙を抑えて、「何事にも限りのあるものです。平家が世を取って20余年ですが、悪行が法に過ぎます。臣下であって朝廷を嘲り、下に在って上をないがしろにする者が、永く続いたためしはありません。やがて滅びるに極っています。その点はお歎きに及びません。ただ、これまでの為されたことをばよくよくお考えあそばされて、この後は民に恵みを施し、お政治に偏頗のないようになされたならば、天下は忽ち君の御代に立ち直って、悪徒は水の泡と消え失せます。お心を強くおぼしめされませ」とて、お食事をお勧めすると、この言葉に法皇もいくらかお心を慰められ、お湯づけを少々召し上がりました。

### 高倉天皇のお歎き

一方、高倉天皇におかれては、関白が流されたり、ご臣下の者が多く官職をやめさせられたのをお歎きになっていたのに、今またお父法皇が鳥羽殿に遷され奉ったことをお聞きになると、お食事もよくは召し上がり、夜も打ち解けてお寝みにもならず、お心地が悪いからとて、ご寝所にばかり引籠っておいでした。

密かに法皇にお手紙をお書きになって、「こういう世には、天皇の御位に即いたとて、何にもなりません。いっそ世を捨てて出家ともなり、山々寺々をも修行してまいりたいと思います」と仰せられたので、法皇が、「そんな事を思っ下さるな。わたしはあなたが御位に居られるのを頼みにしています。若し御位を降りさせ給いでもしたならば、何を頼りに致しましょう。ともかくも、わたしの身の成り行きをご覧になった上にして下さい」と申されると、天皇はいよいよ深くもお歎きになり、このご返事をお顔にお当てなされて、御涙に咽ばれた。

本当に何という世になったのだろう。あまりにひどい清盛の無道ではないか。保元、平治の頃には、朝廷のお身方となって忠義を尽したので、朝廷の用いも厚く、一般の国民も尊敬したのに、今日のこの横暴は、徒に勲功の威に誇って君を苦しめているのです。

さて、清盛は、後白河法皇を鳥羽殿に押籠めて、これまでの院政をお停めすると、皇后は自分の娘であり、関白は自分の婿ですから、すっかり安心したと見えて、これからのお政治はすべて皆天皇のご自由になさるようにと申し上げて、自分は福原に帰って行きました。

しかし天皇は、法皇が鳥羽殿に押籠められておわすのに、何の勇気があって政治を見る気になろう。若し政治が自分の自由になるものなら、先づ第一に、法皇をお出し申そうものを、それさえも出来ないのに、その外に何をすることがあろうと、明けても暮れても、法皇の御事をのみお嘆きになっていて、お政

## 第11話 平氏の暴虐

治のお指図さしづなどはなさらなかった。20日に法皇が鳥羽殿うつにお遷りになって後は、毎夜、夜のご寝所にお入りになると、はるかに大神宮を拝し奉って法皇の御事を祈られた。ご孝行のお志が深かったのであります。

### ご譲位じょうい

さて、年は明けて治承四年となる。その2月21日に、高倉天皇は御位を皇太子にお譲りになり、皇太子は立って第81代安徳天皇あんどくとなられた。まだ別段べつだんにお譲りするほどの事もなかったのですが、これも清盛が思うままに威勢を振るおうとして、押しおろし奉ったのです。この時、安徳天皇あんどくは僅かに3才でしたが、清盛夫婦がいそふは外祖父がいそぼ、外祖母がいそぼに当る事で、特に三后さんこうに準じゅんじるようにという詔みことりを戴いただいた。これは太皇太后たいこうたいごう、皇太后こうたいごう、皇后の宮などと同じ待遇たいぐうを朝廷から賜たまわる事なので、その後の清盛の邸は、まるで上皇の御所ででもあるかのように厳めしくなりました。平家にとっては誠にこの上ないめでたい事なのですが、清盛がそうなるに従って世間は何となく穏やかおだではなくなりました。

( 第11話 平氏の暴虐ほうぎやく 終わり。 次は前頁に戻り、第12話 源三位頼政げんさんみよりまさ へ )